

魔胎都市
六





「くっ!? しまった、まだ妖魔が残って……あ、ああっ!」

百を超える妖魔の大群を倒し息を整えた、隙と呼ぶのも酷な僅かの一瞬。だが、最強の退魔師でさえ油断してしまうその一瞬を、その妖魔は狡猾に伺っていたのだ。意識が散漫した一瞬を死角から奇襲され、咲耶は痛烈な一撃を受けてしまう。

(くっ、油断しました! ですが、この程度の妖魔など……!)

大きく吹き飛ばされるも、猫のようにしなやかに受け身を取る。意識を切り替え、すぐさま立ち上がりうとする咲耶だったが――
にゆる……ぐちゅ、にゆるるるるっ!

「新手!? まだこれほどの数が潜んでいたのですか……!」

物陰から次々に現れる、触手、触手、触手の群れ。太さも長さもちまちだが、どれもが逞しく、それ以上に淫靡だ。

女を犯すためだけにあるような淫魔たちが、素早く咲耶の四肢に絡みつき、四つん這いの姿勢のまま立ち上がらる事を許さない。

その上特に不気味な一匹が、あろうことかコスチュームのハイレグ部分に絡みつき、そのまま力任せに引つ張ってきた。

「く、あ、ああっ! な、何をするつもりですか……あ、あ!」

(く、ううっ! 布が食い込んで……ああ、きつい……!)

グイグイとコスチュームを引つ張られ、よじれた股布がきつく陰唇へと食い込まれる。走り抜ける淫魔に、思わず腰が砕けてしまい、力が込められず立ち上がれない。

「はうっ……はひ、つく、ふううんっ! や、やめてください……あ、ああっ! そんなに食い込ませては……だめです、こ、擦るように動かしては……ふあ、あっああああっ!」

淫魔は陰湿にも、ただ単純に引つ張るだけでなく、前後左右に揺さぶるようにして股布を動かしてきた。結果、長時間の着用で蒸れきつた裏生地に秘唇を摩擦され、フェティッシュな快感が止まらない。

「はうっ、だ、だめです……あ、ああっ! そこ……そこを、そんなにきつくしては……はう、つくううんっ!」

(っ……い、いけません! ここで弱気になつては……快楽に流されては駄目! 今は耐える時……耐えるのです、咲耶!)

湧き上がる嬌声を噛み殺し、淫悦に耐える咲耶。だが、床についた手足に力を込めようとした瞬間、無数の触手に絡め取られてしまう。

「し、しまった!? は、離しなさい……っうあ、ああっ!」

股間に意識を集中していたのが仇になった。触手に絡め取られた咲耶はそのまま宙に浮かされ、一気に物陰へと引つ張り込まれてしまう。
「なっ……こ、これは……!」

そして、そこで咲耶は見た。大きく開いたピンク色の口腔、そこから伸びだす無数の舌――そう。無数に存在していたと思っていた触手妖魔は、その全てが巨大な本体から伸びだした舌だったのだ。そして今、囚われた退魔師は、巨魔の口内へと引きずり込まれつつあった。

イカ臭い口臭をむわあつと吐きかけられ、媚薬粘液まみれの口腔内部へと飲み込まれ――そして、無数の舌の中でも一際大きな、まるで丸太のように太い舌へと、ぐつと股間を押し付けられて跨がられる。
「う、あ……ああっ! いや、は、離しなさい! こんな卑猥な……ひうう、つく、ふううんっ!」

凛々しく抵抗を示す退魔師だったが、肉体の反応はそうではない。唾液まみれの肉舌をぐつと股間に食い込まれ、そのままずる、ずるつと前後に動かされれば、それだけで――

「ひあ、だ、だめ……動かしては……うはあ、あ、んああっ!」

囚われた肢体をビクン! と痙攣させ、あさましい涕泣を搾り取られる敗北の退魔師。魔物の舌は太く長く逞しく、ドクドクと蠢く脈動が股間へと卑猥に響く。大量に分泌される唾液は強烈な媚薬効果を含んでおり、それを塗りつけるようにして前後にコスられてはたまらない。しかも触手の表面には小振りなペニス状の突起が無数に蠢き、よじれた股布の隙間から潜り込んで前後の穴を浅く愛撫されるのだ。

(うああ、う、動く度に小さな触手が入ってきて……な、なんて卑猥な形状なのでしょう。だ、だめです……こないやらしい触手に跨がらされていたら、わ、わたし……また、また……!)

ゾクゾクと駆け巡る被辱の悦び。野太い肉舌に太ももを広げられては牝の本性を暴き出され、小振りなペニスに二穴を可愛がられて肉の悦びを教え込まれる。逃れたくても両足は肉の坩堝に飲み込まれ、グ



イグイと引つ張られて卑猥な責め具から逃してもらえない。

「くはああ……あ、あ、あああつ！だ、だめです……ここで流されては……あ、ああつ！た、耐えるのです……わたしは、こ、こんな快楽になど屈しは……あ、あああつ！」

痛いぐらいに唇を噛み締め、長髪を振り乱して快楽を拒絶する。

だがその高潔な決意を嘲笑うかのように、不測の自体が咲耶を襲った。触手に引つ張られ続けていたコスチュームが、ついに耐えきれず引き裂かれ、一気に剥ぎ取られてしまったのだ。

「やつ……そ、そんな!? うあ……あ、ああ……！」

胸元から股間までを一気に剥かれ、珠の美肌が守るものなく曝け出される。思わず少女のような悲鳴を上げてしまう咲耶だったが、淫魔の餌食には恥じらう暇さえ与えられなかった。

ぶるるんつ、と柔らかに揺れ溢れた豊満巨乳を味わうべく、ヒダヒダまみれの淫猥な肉舌が襲いかかる。魅惑の谷間に肉棒が食い込まされ、肉感と量感を感じるように上下にピストンされた。その度豊満な肉鞠はぶるん、ぶるんつと揺れまくり、耐え難いほどの乳悦が駆け巡る。

「うあつ、だ、だめ……え！胸は……胸はやめてください。いやつ……ふあ、あ、あつあああ……！」

いかな聖人君子でも欲情せずにはいられない、蠱惑的に過ぎる豊満巨乳は、咲耶にとつて最大の弱点だ。これまで淫魔と相対するたび、僅かの例外もなく翻られ虐められ可愛がられ、自分でも怖いぐらいの感度が開発されてしまっている。そんな敏感すぎる弱点を、霊衣の防御を失った状態で、ヒダヒダまみれの卑猥な触手にコスリまくられる——牝の本性を暴かれつつある咲耶に、耐えられる責めではなかった。

「ひうつ、ふあ、あ、あつ、あつあつあつあつ！だ、だめです……胸は、胸をしつこくしては……はあああつ触手太いい、ひ、ヒダヒダが吸い付いて……はああ、おっぱい……だめええ！」

もはや抗うことも出来ず、涙を流してよがり狂う。悶える度にぶるんぶるんが見せつけるように巨乳が揺れ、いつそう触手褻と擦れあつて気持ちよくなってしまう。

コスチュームの庇護を失った弱点は、従順過ぎる双淫乳だけではな

い。剥き出された前後の穴にはより深くにまで淫虫がつきこまれ、催淫粘液が直接粘膜に塗り込められる。以前変わらぬ激しさで肉舌を揺さぶられれば、ぐぼつ、じゅぼつと音を立てて無数のペニスガピストンされ、火照る淫阜を摩擦される——

「くはあ、は、はひい……んんっ！は、入っています……触手つ、直接中につ……はあああつこれだめえ、どんどん次のが入って抜けて……ひあああ揺するのめだめ、これ、これだめええ！」

薄布一枚だけとは言え、あるとないとはまるで快感の質が違う。快楽に弱すぎる弱点を気持ちよすぎる肉具に容赦なく可愛がられ、気も狂いそうなほどの快感が少しも途切れない——

（だ、だめ……だめええ！こ、こんなの耐えられませんか……耐えられるはずありません！わたし、このまま、ま、また……！）

ゾクゾクと駆け巡る、忘れられない——忘れたこともないあの感覚。肉体はとうに屈服しているのに、それをなんとか抑えていた精神まで降参を認めてしまえば、あとは、もう——

「イ、イクツ……イク、イってしまいうう！はあああつだめええ、な、流された駄目なのに……もう耐えられせんつ、イク、イクイクイクまた負けてしましますイってしましますううううう！」

聞くも淫らで恥ずかしい、暴かれた真実の吐露——「イク、イク」と淫らすぎる絶叫をあげ、何度もイキまくる淫乱退魔師。震える太ももで野太い肉橋をぐつと挟み込み、自ら胸と腰を押し付けて快楽を貪る——最強の退魔師が晒すイキ姿は、あまりにも淫らであさましい。

「う、うああ……あ、あああ。はああ……あ、あ……あ……！」
（くううつ……こ、こんな……あ！わたし、ま、また……このよう

な快楽に溺れて……なんと、無様な……！）

惨めな敗北感が、アクメの余韻をいつそう甘美に倒錯させる。美貌を震わせ屈辱に歯噛みする咲耶だったが、彼女はまた、理解している。「う、うあ！ま、まだ動いて……だめえ、ま、またイク……う！」

開発しつくされた豊満媚肉は、淫魔たちにとって最高の好餌。そして、一度本性を暴かれてしまった従順な肉体は、もう、快楽に抗うことは出来はしないのだと——



「くあああ、や、やめなさい！ ス、スーツの上からなんて……くふうう、う、つく、んんん……ううう！」

ぬりゅつ、ぐちゅ、じゅぶぶぶつ！

ラバー生地と肉塊が擦れ合う卑猥な肉音、そして濡れた粘膜と裏生地が擦れ合う淫らな蜜音が、淫臭漂う戦場に響く。シスター・イリーナの凜麗な声色も、悲痛な嬌声となつてそれに唱和した。

（くつ！ 主よお許し下さい……このように下劣な魔物に敗北し、あまつさえ主に授かった身体を、こうして汚されてしまうとは……）

戦いでおった傷の痛みや、肉体を犯される汚辱感などどうでもいい。信仰心篤きシスターにとつては、神の敵である魔物に敗れ、こうして玩弄されているという事実こそが、最大の屈辱だった。

（そうです……このような失態、神の子として許されるものではありません！ 今は耐えて……反撃を。神の敵には、死の報いを……！）

血が出るほどに強く唇を噛み締め、意識を集中する。

イバラの姉妹が相対したのは、巨大なワームのような魔物だった。軟体質な巨体には神罰鞭による攻撃はまるで通じず、されど神敵を相手にして撤退は許されない。果敢に戦うイリーナだったが、スタミナの尽きた隙を無数の肉舌に狙われ、ついに捕縛されてしまったのだ。

貪欲な淫魔にとつて、高潔な聖女は何よりの馳走だ。すぐに食い殺すなどということはせず、こうして舌触手で拘束され、ねつとりと舐めしやぶられて媚肉を隅々まで味わわれている。

「くう、う、つくう……あ、あつあつあつ！ ま、また動いて……んうつ、ふ、不浄の穴ばかり……なんと、下劣な……あつあつああ！」

ぬぽつ、ずぼじゅぽつぬぽつ！ スーツ越しにアナルへ挿入された肉舌が、リズムカルに抜き差しされる。周囲に満ちる高濃度の淫気、そしてスーツを浸潤して染みしてくる媚薬粘液の影響で、イリーナの排泄器官はもはや鋭敏な性感帯になつてしまつていた。そんな弱点を何度も何度も休みなく穿りぬかれ、駆け巡る背徳の悦びが止まらない。

（くつ……な、なんと悪辣な責め苦でしょう。このような……あ、あつ。不浄の穴ばかり責めてくるなんて……つ。お尻の穴なんかで感じるなんて、神の子として許される事ではありませんのに……！）

「くつ、ふううつ！ そ、そうです……はあ、あ、あつ！ 耐えるのですイリーナ……こんな快感、感じてはいけません……んんん！」

背徳感に満ちた禁断の肛悦に、歯噛みして抗おうとするイバラの姉妹。だがそんな抵抗さえも許すまいと、魔物の触手がイリーナの口唇に突きこまれた。可憐な唇を無理矢理に押し割ると、喉奥にまで一気に侵入し、ズボズボとピストンしながら媚薬粘液を垂れ流す。

「んぶうつ、ん、ん、んんん！？ や、やめなさい……んぶあああ……いやらしい粘液がいつぱい……んぶうっだめです、こ、こんなものを飲んで……んぶ、ごぶつ、んちゅっんぶっんむううううつ！」

スーツの上から塗られるだけでも、官能を狂わされるほどの薬効なのだ。そんなものを経口摂取させられたらどうなるか——必死で抗うイリーナだったが、触手の怪力には逆らえない。それでも必死に触手に歯を立て抵抗する聖女だったが、不意打ち気味にスーツの上からクリクリと乳首を弄られ、駆け巡る稲妻に思わず顔を反らされる。

「はひい、んひああつ！ だめえ、そ、そこ敏感すぎ……んぶあああ……あつ激しいつ、お、お口……んぶ、んじゅ、ごぶ……んむうう！」

快楽に抗えず空いてしまった従順なお口へ、咽喉まで届くディープストローク。胃袋へ届くほど大量の白濁を噴射され、身体の内外から淫薬漬けにされて無理矢理に発情させられる。

「んぶああ、んむ、んん、んんん！ だ、だめえ……んぶつ、ごくつ、ごくつ！ ま、魔物の体液……ごぶつ、の、飲んでではダメなのに……んごぶつ、んむ、ちゅむ、んちゅううううう！」

吐き出そうとするより早く、媚薬の効果が現れた。体の中から溶けるように熱くなり、全身が一気に感度を増す。乳房を揉まれるたび背筋が仰け反り、乳首を捏ねられれば軽く意識が飛んでしまう。アナルを穿られても背徳感など感じず、ただただ快感だけが際立つて——！

「んおお、イ、イクツ……イクツ、イッてるううう！？ そんなあつ、こ、このわたしが、こんな不浄の穴でなんて……ひあああつお尻すごいいい、お尻イクツ、お尻でイッてしまいます……ううう！」

ゾクゾクと駆け巡る、屈辱と汚辱にまみれたエクスタシー。スーツ越しのアナルピストンに、イリーナはあさましすぎる肛門絶頂を極め



てしまっていた。

「はあああつ、こ、こんな……あああつ。主よお許し下さい……イ、イリーナは、汚らしい魔物の鬨りものにされて……あああ。ふ、不浄の穴で……お尻なんかで、イカされてしまいました……ああ……」

解放された口から涎を零しながら、虚ろな表情で懺悔する。だがここに、彼女の悔恨を聞く神はいない——救いの主は、いないのだ。

「くうっ……うあ、あ、あああつ!? ま、まだ動いて……そんなっだめえ、お、お尻イッたばっかりなのに……んおお、お、おおう!」

ずぼっ、ずぼっずぼっずぼっずぼっ! 快楽に屈してしまつた淫乱すぎる尻穴へ、罰を下すのは神ではなく魔物の触手。鉄槌の如き力強さで野太い亀頭部分を埋められ、そのままずるるつ、と一気に根本まで引き抜かれる。かと思えばまたしても一気に押し込まれ、自身の愛蜜にまみれたスーツの裏生地で腸粘膜を磨かれた。

「はあああつ、だ、ダメ……それダメ、お尻ダメええ! はあああつ! つこい、お尻、何度も何度も……んおおっお尻犯されるのすごい、い、ま、またお尻イカされちゃう……んおお、お、おっおおう!」

ビク、ビクビクビクッ! 触手に絡め取られた太ももが肉感的に痙攣し、豊満なヒップが右へ左へぶるんぶるんと揺すりたくられる。スーツのクロツチには、恥ずかしいほどに濃い愛蜜が染みを作ってしまった。

(う、あ……ああ。だめ……さ、逆らえません。お、お尻犯されるの……すごい、き、気持ちいい……!)

いった後もヌプヌプとスーツ越しにアナルピストンされ続け、肉粒まみれの触手に股間部分をブラッシングされまくる。休む間も無く響き続ける肉悦の嵐に、涎を零して感じ入る敗北のシスター。媚薬漬けにされたうえに不浄の穴で立て続けにイカされて、もはや、イリーナは身も心も情けないほど快楽に抵抗できなくなってしまうていた。

「んはあ、あああ、あああ。主よお許し下さい……こ、こんな……イリーナは、こんなふしだらな悦びに溺れて……んおおおつまた激しくつ、スーツ着たまアナルずぼっだめええつ、こんな、こんなの続けられたら覚えちゃいますからつ、不浄の穴でイカされるの、

イリーナ、もう、もうクセになっちゃますからあうう!」

一度知ってしまった禁断の肛悦を、二度と忘れさせないと覚え込まされる、執拗極まるアナルピストン、エデンの果実の味を知ってしまったアダムのように、アナル絶頂の味を覚え込まされてしまったイバラの姉妹は、もう、戻れない墮落への道を転がりつつあった。

「んおおおおイクイクッ……またイキますっ、お尻でイッちゃいますうっ! はああああつ奥まで一気に貫かれてイクつ、ぬ、抜くのもダメ……ゆっくり抜かれるの気持ちよすぎますからあつ、こんな、こんな罪深すぎる快感……んおおおお、おっひいいい……!」

腸奥までを無理矢理に突き犯される、マゾヒスティックな被辱の快感。ゆっくりと時間をかけて引き抜かれる、排泄欲を煽り立てる不浄の肛悦。そのどちらもが耐え難いほどに心地よく、股間への肉粒摩擦と相まって、交互に味わわされるせいで慣れる事さえも許されない——天国と地獄を常に垣間見せられる、それはまさに終わりのなき責め苦。

「んおおつ、こ、こんなあ……んはあああつまたイッてるつ、ゆっくり抜くの本当ダメつ、は、速くするのもダメダメダメ許してええ!」

ゆっくりと引き抜かれてイカされ続け、かと思えば素早いピストンで一気に何度もイカされる。イキっぱなしの秘唇を肉粒触手で摩擦されてはイカされて、再び緩急をつけてのアナルピストンにイカされる——もはやイリーナのアナルは、一秒たりとも休む間も無くイカされっぱなしの、どうしようもない淫乱肉穴へと墮とされてしまっていた。

「んはああ、こ、こんな……お、お、おっおおおつ! ゆ、許してえ……もうお尻でイクのいやですつ、イ、イキすぎて辛い……んはあああつまたアナルイッてる、これ、これダメです……あああ主よお許し下さい、イリーナ、も、もうこんなのもう忘れられませんか……不浄の穴でイカされる悦びに……イリーナは……ア、アナル触手に犯されて墮とされてしまいますイクイクイクアナルイッくううう!」

まるで便器に跨るような無様すぎるガニ股ポーズのまま、触手をむりゆむりゆとひり出しながら何度も何度もイキまくる。

神への愛も篤き信仰心も、肛辱の聖女を救済してはくれない——



「ぐうっ！ この……は、離しなさいな、汚らわしい！」

空気を震わす凜々しい怒声に、それだけでも相手を射殺さんほどの鋭い視線。放たれる殺気は、触れれば切れてしまうほどに剣呑だ。

おぞましい触手に絡みつかれ、たつぷりと媚薬粘液を刷り込まれ媚肉を慄れながらも、清華の闘志はいささかの衰えもない。

「っ……この……それ以上は許しませんわよ、下郎っ！」

無数の触手に自由を奪われた拘束状態でも、まだ抗戦を諦めない。

至近距離でも恐るべき破壊力を発揮する発射を叩き込むも、触手の群れにはまるで効果がなかった。

（くっ！ やはり……打撃が少しも通じませんわ。愚鈍な妖魔の分際で、なんと厄介な……！）

清華が相手取るのは、小山の如きナメクジの魔物だった。肥大化した塊状のボディは衝撃を吸収し、ヌメヌメした粘液は打撃を反らしてしまふ。巨大な口腔から吐き出される無数の触手舌も同様の性質を持ち、退魔シスターの剛拳を物とせず接近し遠慮なく絡みついていた。――「くっ！ なんて最悪な相手ですの……このわたくしの拳技が……神守流護神術が、少しも通じない魔物だなんて……！」

徒手空拳を得手とする戦闘シスターにとって、あまりにも相性が悪すぎる、想像する中で最悪の敵。それでも、気高いプライドは撤退する事を許さず、果敢に接近戦を挑むも――結果はこの通りだ。

「くうっ……う、あ、ああっ！ う、動かないで……はあ、あ、あ、あっ！ き、気持ち悪いですわ……うあ、汚らわしい……いつ！」

にゆるにゆる。ぐちゅぐちゅ……。半ば口腔に飲み込まれた状態のまま、無数の肉舌によつて体中を舐め回される。豊満な乳房や発育の良いヒップを形が変わるほどの強さで揉み潰されるのは、例えばボディスーツ越しであつたとしても耐え難い辱悦だ。

「くふう、こ、この……はあ、んんっ！ げ、下衆め……そ、そのような場所ばかり執拗に……ふああっ吸つてはダメですわ、む、胸ばかり執拗な……ふあああ、あ、あああうっ！」

イソギンチャクのような触手に、スーツの上からがぶり、と乳房を飲み込まれた。スーツ生地を浸潤するほどの量と濃度の媚薬を塗りつ

けられながら、うごうごと蠢く触手に乳頭を擽られ、かと思えば乳峰全体を吸い上げられる――見るからに生意気な上向きの乳房も、屈服せざるを得ない変幻自在の快楽責め。拒絶する凜音にも、徐々に媚びた甘いものが混ざっていくのが止められない。

（屈辱ですわ！ このわたくしが、このような下郎相手に……！）

自らの反応に顔を赤らめ、屈辱に悶える気高き聖女。それでも強気に魔物を睨みつけるも、囚われの拳士にできるのはそこまでだ。

どれだけ抵抗しても効果はなく、徒に体力を消耗するばかり。それどころかびちゃびちゃと蠢く粘液触手と熟れた肢体が擦れ合い、媚薬粘液を刷り込まれていつそう発情してしまう――

「こ、この……放しなさい！ くうっしっこいですわ、どんどん吸い付いて……はうっ、い、いやらしい動き……はあ、んんんっ！」

淫らに熱を増す肉体に活を入れ、懸命にもがき続けるイバラの姉妹。逆転不能の泥沼でも最後まで抵抗を諦めない、激しい気性こそ清華の強みだが――そんな生きの良さは、凌辱者の嗜虐心を煽るだけだ。

「グジュルル……グウ、グオオオオオ……！」

無数の舌で獲物を擽るだけだった淫魔が、大きく口を開けて咆哮する。肥大化した体内にたつぷりと詰まつているのだらう、濃厚極まる淫気がむわあつと吐きかけられ、噴水のような勢いで吹き出す媚薬粘液を全身にぶっかけられる。

（な、なんて強烈な淫気……それに、濃厚な媚薬粘液ですの!? こ、こんなものを浴びせられたら……ああ、か、身体が……あ……！）

「はあ、はあ、はあっ！ あ、熱い……はあ。身体が疼いて……おかしくなつてしましますわ……あ……！」

白濁まみれの肢体が、加速度的に疼きを増す。美尻も乳房も燃え上がりそうに熱を増し、汗にまみれた美肌が怖いほどに感度を増す。触手の愛撫どころか密着スーツのフィット感だけでも感じてしまうほどで、スーツ内部では溢れる汗と愛蜜が蒸れてしまうほどだった。

「くうっ、い、いけませんわ！ こ、これは……このような淫気に惑わされては……うああ、こ、今度は何を……おおっ!?」

咄嗟に精神を集中し、淫気の影響を振り払おうとする。だがその瞬



間、肉舌たちがこれまで以上の強さで蠢き、一気に全身を引っ張られた。同時に大きく口腔が展開し、その奥へと引きずり込まれていく。
(なっ……そんな!? この妖魔、わたくしを食べる気ですの!?)

それが意味するものを察し、さしもの強気なシスターも声を失った。只でさえ一瞬で発情させられるほどの淫気と媚薬、それがたつぷりと詰まっているであろう体内へ吞まれてしまつては、一体どうなつてしまうのか——考えただけでも子宮が疼き、乳首が固く勃起してしまう。「やっ……お、おやめなさい! このまま丸呑みだなんて……いやあ、た、食べないで……いやあ、あ、ああああ……!」

思わず漏れてしまった弱気な声も、おぞましい咀嚼音に飲み込まれる。必死であがくも触手に四肢を絡め取られ、無理矢理に口腔内へ、そして狭苦しい淫腔へと押し込まれて吞まれていく——

「う、うあああ……あ、あ! あっあああ……!」
ずるっ、ごくんっ! 少女一人を足先から頭まで丸呑みにし、魔物の身体が不気味に蠕動する。抵抗むなしく、清華は魔物に喰らわれ、その体内にとらわれてしまったのだ。

そして魔物の体内は、清華が想像していた通りの——いや、それ以上淫らで気持ちよすぎる淫獄だった。

「うあつ、お、おやめなさい! こんな、全身同時なんて……はあああんっそこだめですわ、クリ摘んでは……ひい、ツクひいん!」

うぞうぞ、ぐちゅぐちゅ……! 全方位から数え切れないほどの触手に集られ、ありとあらゆる場所を同時に舐られ吸われコスられる。四肢を大型個体に丸呑みにされ、もはや身じろぐことさえ出来ない状況で、清華は延々と全身愛撫で悶えさせられていた。

「はああつ、そ、そこダメ……はひいんっおっぱい吸わないでえ、お、お尻もあそこも激しすぎますわ……ああ、顔は……いやあつ!」
何十、何百、いや何千もの肉蟲の大量。魔物の体内は、あまりに淫らな肉と触手と粘液の坩堝だった。肉部屋中に充満した淫気に官能を焦がされ、スーツを浸潤するほど濃厚な粘液をこつてりと塗り込められる。発情しきつた媚肉の感度ときたら、密着スーツの上から愛撫さ

れるだけでも、気が狂いそうなほどだ。

(うああ……ダメ……ダメ……! 淫気が濃すぎますわ……媚薬も、濃厚すぎて……こんな状態で、全身一緒にされたら……あ!)

「くうっ、う、動かないで……ひいんっ、許してえ! こ、これ以上は無理ですわ……こんな大勢で一緒になんて……ひあ、あああ……!」
無意識のうちに弱気を見せてしまうほどに追い詰められた清華を、触手の群れはいつそうの快楽地獄で責め懲る。

濡れたスーツ生地に浮き出すほど勃起してしまったクリトリスを、器用にクリクリと剥き出して、スーツ越しにシゴきまくって追い詰める。よじれたスーツに浮かん尻割れには野太い触手が突きこまれ、尻谷を左右にこじ開けられながらピストンされた。悶える度にぶるんと揺れまくる乳房には何匹もの触手がとぐるを巻き、根本から締め上げながら先端のぼちちを吸い上げられてシゴかれる——

「だめえっ、乳首とクリ一緒にシコシコするの卑怯ですわあ! お、お尻とおっぱいも一緒に、全部こんなに激しくされたら……はああダメえ、こんなの続けられたら、わたくし、もう……!」
ゾクゾクと駆け巡る、敗辱の予感。

もう止められない、止められる訳がない——!

「イ。イクッ……イク、イっちゃううっ! な、なんて屈辱ですのっ、こ、こんな汚らしい触手ごときに……このわたくしが、イ、イカされてしまうなんてええ……!」

悔しげな、しかし悦びを抑えきれない嬌声を上げ、全身を痙攣させてイキ狂う。乳首でも淫核でも乳房でも尻谷でも——全身で同時に味わう多発絶頂の狂悦に、清華は喉を仰け反らせてイキまくった。

「はあ、はあ、はああつ! こ、こんな……このわたくしが、なんと無様な! 触手に抵抗出来ないなんて、屈辱的すぎますわ……あ!」
気高いプライドが軋みを上げ、その屈辱感がいつそうの甘美さとなつて官能を倒錯させる。涙に濡れた瞳を震わせる敗北の退魔師に、さらに多くの触手が絡みつき、更なる体奥へと引きずり込んでいく。

(うあ、ああ。食べられてますわ……わたくし、こ、このまま……)
墮ちて吞まれたシスターの嬌声は、もう、外に聞こえない——



「ん、んむうううっ！ んぶ、ん、んんんん！」
ずぼっ、じゅぼぼぼぼっ！ 猛烈な勢いで口唇に突きこまれた触手が、喉奥にまで突きこまれる。

激しく口内を掻き回されて、光流は鳴咽にも似た悲鳴を上げた。

「ぐぶうっ、んぐうっ！ お、おやめなさい……下等な淫魔ごときがこ、このわたくしを好き勝手出来るなどと……んぶ、んぶううっ！」
嫌悪感も頭に、拒絶の言葉を吐く荒神流の退魔少女。野太い触手に四肢を囚われ、空中に持ち上げられて拘束されながらも、その強気はいささかも衰えていない。

（油断しましたわ……これでは詠唱も出来ません。式さえ呼び出せば、この程度の妖魔など、物の数ではありませんのに……！）

屈辱に歯噛みしたくても、口内をパンパンに肉詰めされてはそれも出来ない。せめてもの抵抗に歯を立ててやつても弾力性に飛んだ触手は意に介さず、むしろ表皮からぶじゃああつ、と粘液を分泌されて飲まされてしまう。

「くっ、んむ、ん、んぶうううっ！ うあ、ヌルヌルしたのが……んぶ、ごく、んぐ、んじゅうっ！」

（あ、ああ!? いけません……媚薬ですわ。こ、こないやらしいモノを飲まされては……はああ、か、身体が……疼いて……！）

魔物の分泌する体液は、女を狂わす強力な媚薬だ。ヌルヌルとコスチューム越しに塗られただけでも感度を増してしまうほどの強烈な魔薬なのに、こうして経口で直接飲まされての効果は、別格だった。

「はあ、はあ、うあ……んぐ、んじゅぶっ！ だ、だめですわ……こんな汚らしいモノ、の、飲んで……んぐ、ごぶ、んじゅっ！」

じゅぼっ、じゅぼっじゅぼっじゅぼじゅぼ！ 喉奥にまで触手が突きこまれ、食道に直接媚薬粘液を流し込まれる。その度身体の芯から溶けるように燃え上がり、淫らな熱に思考までもを蕩かされる。

「はああ……あ、あむ……んむ、ちちゅ、んんっ！ はあ、だ、だめっ……あはあっ熱いですわあ、か、身体がどんどん火照って……あむうっ、じゅる、ちゅむ……ん、ん……んん！」

吐き出さなければ、抵抗しなければ——そんな思考も、圧倒的な淫

悦に溶かされた。珠の美肌からはどつと汗が噴き出し、溢れる愛蜜が華麗なコスチュームを湿らせる。衣装の上からでもはつきりと形がわかるほどに屹立しきった勃起乳首を、細い触手にクリクリとしごかれれば、たまらないほどの切なさに打ちのめされた。

「はああ、だ、だめえ……あんっ、んちゅ、んむうっ！ ち、乳首……はああっお豆も、感じるどころばかり……はああ、あああゝ！」

クリクリ、シコシコ！ 股布から潜り込んだ触手にクリトリスを探り当てられ、包皮を剥かれてシゴかれまくる。まるで同期するかのよう乳首も激しくシゴかれて、気も狂わんばかりの快感が共鳴する。

「ひい、ひい、くっつひいひいんっ！ そ、それダメですわ……一緒にシコシコなんてっ、い、今は敏感すぎますのに……媚薬のせいでっ、か、感じすぎてしましますのに……いいいっ！」

両の乳首と剥き出された淫核——ただでさえ感じやすすぎるのに、媚薬の効果で余計に快楽に弱くなってしまった弱点を、三箇所同時に責めまくられ、為す術もなくよがり狂わされてしま少女退魔師。あさましい喘ぎをこぼす口穴に、いっそう深くまで触手が挿入され、追加の媚薬粘液をこれでもかと飲まされる。

「ひ、ひぶああっ……ごく、んむ、ごくっ！ いやああ、も、もう飲ませないでください……はむううっすごいい、か、身体が溶けそう……ごく、んむ、ちゅむ、ちゅぶっ！」

（うあ……ダメ……え！ 媚薬の効果……すごすぎますわ。わたくしの身体……こ、このままでは、もう、もう……！）

怖いぐらに感度を増してしまった肉体を、無数の触手に容赦なく可愛がられる——発情しきった身体は自分のものではないかのように淫らに反応し、あさましい快感を覚えてしまつて抑えられない。

さしもの歴戦の退魔師も、媚薬粘液漬けの触手愛撫に、もはや屈服寸前だった。

（くううっ……し、しかし……ああっ！ わたくしは荒神の一員……こ、このような淫魔に屈するなど……ありえませんが、あつては、ならないのですわ……！）

それでも荒神家の矜持に食い下がり、必死に意識を保とうとする。



だが巨魔の責めは、そんな抵抗さえもまるごと呑み下すものだった。

「はあ、はむ、んむ……ひ、あ、あああつ!?」

ぐばあつ、と巨大な口腔が開き、そのまま頭から呑み込まれた。強烈な吸引力と触手による押し込みで、光流は頭から足先まで、一気に淫魔の体内へと呑み込まれていってしまう。

「うあつ、や、やめ……おやめなさい! こんな、淫魔に丸呑みにされるなんてイヤですわ……やあ、た、食べないで……ええう!」

ようやく触手が引き抜かれた口唇から漏れるのは、惨めに許しを請う哀願。だが貪欲な淫魔が、そんなお願いを聞いてくれるはずもない。光流は豊満な肉体全てを呑み込まれ、そして――

「ひあ、あ、あつあつあつ! やああ、ゆ、許して……こんな、こんな卑猥な……んおおつ入ってくるう、前も後ろも……い、一緒に……ええう!」

魔物の体内は、媚薬粘液と肉触手の坩堝だった。無尽蔵とも思える触手が全身に絡みつき、霊衣を引き裂かれて穴という穴を犯される。野太い触手が何本も何本も挿入され、前後の穴を交互にピストンされて穿りぬかれた。

「んおお、お、おおつ! う、動かないでください……んおおおおつそれだめですつ、前と後ろ順番にズボズボなんて……はああんつそれ許してえ、身体、敏感すぎますのに……い……い……」

ぬぶぬぶ、ずぼずぼ、ぬぶつずぼずぼつ! 子宮奥まで突き上げられながら、お尻では引っこ抜かれて排泄欲を煽られる。かと思えば腸奥までを埋め尽くされながら、今度は膣壁を引きずり出されるような勢いで逆方向に引き抜かれる――前後交互にリズムカルな抽送を見舞われて、狂いそうなほどの快感が一秒たりとも止まらない。

悶える度に淫らに揺れる巨乳には大量の吸盤を備えた肉触手が押し当てられ、乳首や乳肌には直接吸盤を吸い付けられて揉みつぶされた。

「はあ、あ、ああ! お、おっぱいもこんな……はあああつ吸い付いてきます、な、なんて卑猥な触手なの……ひいっ乳首引つ張らないでえ、チュパチュパしながら揉むの……はああ、ゆ、許してえう!」

わがままに熟れ育った乳房も、簡単に屈服してしまう吸引搾乳。辛

いほどの快感に身をひねれば、両太ももに挟み込まれた肉粒まみれの肉舌と股間とが擦れ合い、いつそうの気持ちよさに打ちのめされる。その間にも二穴ピストンは容赦なく続き、大量に吐き出される媚薬粘液により体内からも発情させられていく。

（うああ……だ、ダメ……ダメえ! 淫気も媚薬も強力すぎて、触手の形も動きも卑猥すぎて……! こ、このままでは……快感の虜になつてしましますわ……あ……!）

そう意識してしまった時点で、もはや敗北の退魔師に勝機はない。どばあつ、と大量の白濁が肉部屋中からぶちまけられ、堕ちかけた肉体はさらに淫気の虜に堕してしまう。同時にピストンを続ける触手たちも、ビクンビクンと脈動を早め――

「ひっ……だ、だめえ、それだけはダメですわあ! ゆ、許してください……い、今出されたら……前も後ろも、一緒に犯されてしまったら……わたくし、もう、もう……!」

黒髪を振り乱し、ふるふると美貌を震わせて懇願する。そんな哀れな獲物へと、触手たちは期待通りに大量の中出し射精をぶちまけた。

「う、うあ……あ、あ、ああ! んっひああああああ――!」

どぶつ! どぶどぶどぶどぶ! ぶっしやああああああ!

「ひああ、あ、あ、ああつ! で、出てますわあ……前もいっぱい、後ろもいっぱい! ひあああつ熱いのお、ドブドブしながらズボズボされたら……わたくし、もう、もうダメですわ……あああう!」

すでに屈服しきっていた肉体に、どうしようもないトドメの一撃。少女の意識は、もはや、それに抗うことなどできなかった。

「イ、イクツ……イっちやう! はあああつすごい、ま、前もイクツ、後ろもイクツてますわあ……んおおつ出しながら動かれたらま

たイっちやう、おっぱいもイっつてるつ、あそこもイクツ……も、もうイクの止められませんの触手相手に屈服してしまいますのおう!」

あさましい嬌声を上げ、背筋を仰け反らせてイキまくる。

その矜持までもを飲み干されてしまった少女退魔師に、もはや、快楽に抗うすべなど残されていなかった――

■平均的な大きさの対比■



今回の相手の巨大淫魔

動きは速くないが見た目通り非常にタフ。口の中に多量の触手舌があり、獲物を捕らえる。外見は同じに見えて耐性が異なっていたり、触手舌の種類が多様であったりとやっかいな淫魔である。

お腹には媚毒粘液がためこまれており、吐き出す息にも強い催淫効果がある。触手で獲物を絡め取り嚙った後、体内で粘液漬けにして霊力を吸収する。霊力に満足すると排出管から獲物を排出し去って行く。



乳首ねぶり蟲
魔界ブリーダーが飼育している特別な淫蟲。
過去に咲耶の胸を大きく育てた淫蟲は品評会
で金賞を取ったとか……

何でも魔界付ければ良いってもんじゃないぞ！
どうも竜胆です。お買上げいただきありがとう
ございます！
今回汁が間に合わなくてすみません……

■奥付■

魔胎都市 六

2017年 12月31日 初版発行

2018年 8月12日 二版発行

○発行

Radical Dream

HP URL <http://www.rindou.sakura.ne.jp>

twitter : rindou2902

E-mail rindou@rindou.sakura.ne.jp

○著者

イラスト：竜胆

文：黒井弘騎

○印刷会社

株式会社サングループ

 **SUN GROUP**
<http://www.sungroup.co.jp/>

●18歳未満の購入。閲覧を禁止いたします。

●無断複製および無断転載を禁じます。



Radical Dream 2017